

3 消費地からのホットニュース、トピックス

(1) 卸売市場経由率低下の報を読んで

先日の新聞報道に生鮮野菜などの国内総流通量に対する卸売市場経由率は、2004年度も牛肉と花きを除いて一段と低下したという農林水産省の推計が伝えられました。

- ・ 青果物 65.8% (前年比 3.7%)
 内 野菜 76.8% (3.4) 果実 49.0% (5.0)
- ・ 水産物 62.9 (0.3)
- ・ 食肉 11.6 (0.6)
 内 牛肉 17.3% (+1.5) 豚肉 9.0 (1.3)
- ・ 花き 82.6% (+1.7)

牛肉はBSE問題以降の米国産輸入禁止が続いて国産牛の流通が上向きであったこと、逆に豚肉は輸入物の流通が増加したことが示されており、花きの上昇については大手卸の集荷対策強化と総合商社の占有率低下を背景として4年連続での上昇と言っています。

青果物についてみると、1985年に野菜87.4%、果実81.4%であった卸売市場経由率が漸減して、2000年には、野菜79.2%、果実57.6%となって卸売市場の地盤沈下と市場外流通の拡大が進んでいると評されている現状となっています。確かに流通環境の変化は末端小売の場に行くほど速く大きくなっているのに、卸売市場での対応は極めて遅いと見られているのは事実ですし、法制度を含めて実態と乖離している面が多すぎるのかもしれない。使い勝手の悪さや硬直化している市場機能の改善など、喫緊のクリアしなければならない課題は山積ですが、無用の長物と全否定することも難しいのではないのでしょうか。

スーパーなどの取組みで産直など市場外流通の場で商流・物流両面で市場を利用している点が見られます。特に、価格形成に関しては、作る側・売る側双方の思惑の中で市場価格を基準にしたやりとりも度々見受けられます。また、天候異変で生産環境が悪くなって契約数量が手当てできない時の緊急避難の場としての利用など、それぞれの立場で市場を利用しあっている現実も見過ごしてはならないと思います。業界再編を始めとする自助努力は勿論のことですが、作る側・食べる側それぞれからも在るべき姿への話題提供してやることも良いのではないのでしょうか。

農産物の卸売市場経由率

年	野菜 (%)	果実 (%)
1985	87.4	81.4
90	85.2	76.1
95	80.8	63.4
99	80.3	57.2
2000	79.2	57.6
01	79.4	54.1
02	80.0	55.5
03	78.7	51.0
04	76.8	49.0